忍びの双璧は今、忍者観光でつながる ～伊賀（いが）・甲賀（こうか）～

最新技術を駆使して新型コロナワクチンの開発が進む現世とは異なるが、近世以前の日本にも優れた予防薬・治療薬があり、伊賀や甲賀の「忍者」が、製薬・売薬の一翼を担っていた。天下人をはじめ、各地の戦国大名に重用された伊賀者・甲賀者だが、隣り合う地域を本拠地とし、協力・連合も行われてきた。そして現在、両市は忍者観光によって再び連携を深めている。

1.伊賀市の上野公園にある「伊賀流忍者博物館」。2.同博物館内の「からくり忍者屋敷」。3.屋敷の入り口には忍者の人形が。

光秀の追っ手をかわし 天下人の家康を救う

映画やアニメを通し、世界各地で大人気の「忍者」。その代表選手、伊賀者と甲賀者は、ドラマ上では対立しているイメージだ。しかし両エリアは入り組んだ丘陵地を境に隣接し、共に忍者の発祥地とされている。

忍者の実像は、伊賀衆・甲賀衆と呼ばれる「土豪」や「地侍（じ）」たち。戦国時代、この地域には有名な大名が現れず、土豪や地侍は自治の必要性から連携して地域を守っていた。現地を訪ねると、なだらかな丘陵と宅地が交互に現れ、地域間の往来・交流が比較的容易だったと体感できる。

この「忍びの里」では農業のほか、古くから林業や山伏修業が行われてきた。木こりは木から木へ飛び移って木材を生産し、山伏たちは修行中に薬草の知識を身につけて全国に広めた。こうした職能を用いて忍びの技術が磨かれ、戦国時代には各地の大名に重宝されるようになった。

伊賀者は火薬に詳しく戦闘能力に優れ、甲賀者は売薬業などを通じて諜報活動に秀でたと言われる。天下人とのエピソードもさまざまに伝えられているが、とりわけ有名なのは徳川家康の「神君（くん）伊賀越え」である。

1582年（天正10年）、本能寺の変で織田信長が不慮の死を遂げたとき、家康は泉州の堺にいた。視察と物見遊山が目的だったので、従者は三十数名のみ。本拠地の三河まで最短経路で帰るため、地形が複雑な忍びの里を通った。そのとき一行を導き、護衛したのが伊賀者と甲賀者だ。おかげで、明智光秀からの追っ手や山賊も振り切ることができた。家康は功労者の忍者200人を召し抱え、伊賀出身の重臣・服部半蔵を組頭（くみがしら）とした。

ときは移って2017年、「忍びの里 伊賀・甲賀－リアル忍者を求めて－」が文化庁・日本遺産の認定を受けた。忍者の文化や伝統など、その真の姿を物語り、地域活性化につなげる取り組み。両市参加の協議会では今年度も、ガイド育成やサイクリング事業を展開している。

＼甲賀の名前の由来の紹介／

甲賀は、いにしえから「こうが」ではなく「こうか」と呼ばれていた！

甲賀市の正式な呼び方は「こうかし」。市町村合併後、市名を定めるため決選投票が行われ、従来の甲賀郡（こうかぐん）の読み方を受け継いだ。古代の豪族・鹿深（かふか）氏が起源だといわれる。

一方、民間企業名などにおいて「こうが」と呼ぶケースもあり、併行して二通りの読み方が使われている。

KOKA 甲賀

4.かつて本物の忍者が暮らした「甲賀流忍術屋敷」。5.天井に貼り付いた忍者の人形。6.屋敷の当主・望月家は薬を売りながら情報を集めた。右の縦長看板は薬の名称。

共通の観光資源を活用し、関西・東海の圏域を越えて連携

●忍びの里伊賀甲賀忍者協議会

伊賀・甲賀の両市は、「忍者」「焼き物」などの共通資源を題材とした、地域振興や観光振興を展開してきました。特に「忍者」は、両市の核となる観光資源であり、東海圏の伊賀市、関西圏の甲賀市が連携することで、広域的な観光振興を図っています。

両市の連携は、2004年度の市町村合併以降に「観光・防災・交通・教育」の分野でスタート。観光分野では2007年、両市長が手裏剣打ち対決などを行うイベントを開き、翌年以降も継続的に開催してきました。その後も人事交流などで連携を深め、2013年に「伊賀甲賀観光連絡協議会」を設置、2017年に文化庁の日本遺産認定を受けたことから、現名称へと改めました。

将来的には、協議会の自走化を進め、全産業、各種団体や自治体が連携を深めて、民間投資意欲を刺激しながら地域産業の発展に寄与し、さらなる地域・観光活性化を図っていきます。

甲賀市
観光企画推進課 課長
近藤 直人さん

伊賀市
観光戦略課 課長
川部 千佳さん

日本遺産

地域の歴史的魅力や特色を通じて、日本の文化・伝統を語るストーリーを認定し、地域活性化を図る制度。文化庁が認定。

JAPAN HERITAGE 日本遺産

伊賀徳永寺

7.伊賀越えの際、家康が宿泊した徳永寺。8.忍者の人形を乗せた説明板。9.家康から許された葵紋の瓦。

伊賀上野

10.白亜三層の優美な「伊賀上野城」天守閣。11.文化人による色紙がはめこまれた、天守閣の天井。12.大阪城と並び、日本一の高さを誇る高石垣。13.伊賀鉄道、上野市駅の愛称は「忍者市駅」。

城郭、遊水地やダム、文化スポットも見学を

伊賀市の上野公園にある『伊賀上野城』の建築・構造物は一見の価値がある。家康の信任厚く、築城の名人でもあった藤堂高虎は、豊臣方との戦いに備えてこの城を築いた。五層の天守閣は自然災害で失われたが、高さ約30mもある高石垣が、戦国の世情を伝えている。

現在の天守閣は昭和7年に復興されたもので、別名を「白鳳城」と言う。木造三層の大天守と、二層の小天守で構成する複合式。最上階の格天井には、日本画家・横山大観など文化人や政治家から贈られた色紙がはめ込まれている。

上野城の東方、『鍵屋ノ辻』では、江戸時代に敵討ちが行われた。歌舞伎の「荒木又右衛門の三十六人斬り」として知られ、跡地に復讐記念碑がある。

上野盆地では、淀川水系の木津川が、服部川・柘植川と合流し、山間の岩倉峡へと向かう。この狭い渓谷が流れを阻害して、上野盆地は洪水を繰り返してきた。そこで合流地点付近に『上野遊水地』(長田・木興・小田・新居遊水地の総称)が設けられ、2015年に運用を開始した。遊水「池」ではなく「地」と書く表記に注目したい。大洪水時に、あふれた水を一時的に貯める広大な土地で、その時だけ池が出現する。

堤防を部分的に低くした「越流堤」が設けられており、洪水初期にこの越流堤から水を遊水地へ導き、洪水後期には貯まった水を排水門から川へ戻すシステムだ。現地は自然豊かで野鳥や野の花も見られ、見学しながら開放的な気分に包まれる。

その遊水地事業と共に、1968年に計画されたのが『川上ダム』。治水のほか、水道用水の取水、川の流れの安定を目的に建設が進められている。重力式コンクリートダムで、工期は2022年度までの予定。2019年にダムサイト右岸天端の展望台が一般開放された。その名も「WELCOME川上ダム観眺台(みてチョーだい)」。建設中のみ観ることができる。

そして甲賀市では、2020年春に新築移転したばかりの『信楽伝統産業会館』へ。甲賀は医薬品と共に信楽焼の産地としても知名度が高い。その信楽焼もまた、日本遺産「きっと恋する六古窯―日本生まれ日本育ちのやきもの産地―」の構成文化財となっている。

この会館では、鎌倉期以降に作られた信楽焼の優品、製造道具、映像資料などから、その歴史が学べる。

旅の終盤、味わい深い工芸品に触れ、忍術や製薬、焼き物、そして建築という、日本が誇る文化や産業に思いを馳せてみては。

「信楽伝統産業会館」では懐かしい三輪自動車も展示されている。

甲賀信楽

16. 17.信楽焼の歴史・文化を堪能できる「信楽伝統産業会館」。鎌倉時代から現代までの信楽焼を展示。18.狸の置物でも知られる信楽焼。

14.伊勢街道と奈良街道が交差する「鍵屋ノ辻」。15.辻には「伊賀越復讐記念碑」が立つ。伊賀越えとは畿内から伊賀を通って東国へ行くこと。

伊賀川上ダム

21.「川上ダム」建設の様子を見学できる「WELCOME川上ダム観眺台(みてチョーだい)」。22.ダムの堤体打設実績は、2020年8月末で進捗率約66%。

19.洪水を遊水地へ導く、コンクリート製の越流堤。20.国交省による長田遊水地の標示板。

伊賀長田

「上野遊水地」の一つ、長田遊水地の排水門。内側に伊賀上野城が望める。